

雁坂越

幸田露伴

青空文庫

その一

ここはこうしゅう甲州ふえぶきがわの笛吹川の上流、ひがしやまなし東山梨のかまわばら釜和原とい
 う村で、戸数こすうもいくらかも無い淋さみしいところである。背後うしろは一帯いつたい
 の山つづきで、ちようどその峰みね通りは西山梨との郡こおり界ざかいにな
 っているほどであるから、もちろん樵夫きこりや獵師りようしでさえ踏ふみ越こさ
 ぬ位の仕方の無い勾配こうばいの急な地で、さて前はというと、北から
 南へと流れている笛吹川の低地ひくちを越してのその対岸むこうもまた山々の
 連続つながりである。そしてこの村から川上の方を望めば、いずれ川上
 の方の事だから高いには相違そういないが、恐ろしい高い山々が、余り

高くつて天につか悶えそうだからわざと首をすく縮めているというような
恰好かつこうをして、がん張ばつている状態ありさまは、あっちの邦土くには誰だれにも
見せない、意地悪く通とおせん坊ぼうをしているようにも見える位だ。
その恐ろしい山々の一卜ひつらな列りのむこうは武蔵むさしの国で、こっちの甲か
斐いの国とは、まるで往ゆき来かいさえ絶えているほどである。昔時むかしはそ
れでも雁坂越いと云つて、たまにはその山を越して武蔵へ通つた人
もある、今でも怪あやしい地図みちに道路があるように書いてあるの
もある。しかしこの釜和原から川上のぼへ上つて行くと下釜口しもかまぐち、釜
川まがわ、上釜口かみかまぐちというところがあるが、それで行止りになつてし
まうのだから、それから先はもうどこへも行きようは無いので、
川わたを渡つて東岸ひがしぎしに出たところが、やはり川下へ下るか、川かわ

浦うらという村から無理に東の方へ一ト山越して甲州裏街道うらかいどうへと出るかの外には路みちも無いのだから、今では實際雁坂越の道は無いと云った方がよいのである。こういうように三方は山で塞ふさがつているが、ただ一方川下の方へと行けば、だんだんに山合やまあいが闊ひろくなつて、川が太ふとつて、村々が賑にぎやかになつて、ついに甲州街道へ出て、それから甲斐一国の都会みやこの甲府こうふに行きつくのだ。笛吹川の水が南へ南へと走つて、ここらの村々の人が甲府甲府と思つてゐるのも無理は無いのである。

釜和原はこういつたところであるから、言うまでも無く物寂ものさびびた地だが、それでも近い村々に比べればまだしもよい方で、前に挙げた川上の二三ヶ村はいうに及およばず、此村これから川下に当る数ヶ

村も皆この村には勝らないので、此村にはいささかながら物を売
る肆みせも一二軒けんあれば、物持だと云われている家も二三戸こはあるの
である。

今この村の入口へ川上の方から来かかった十三ばかりの男の児こ
がある。山間僻地さんかんへきちのここらにしてもちと酷過ひどすぎる鍵裂かぎやきだらけ
の古布子のふるぬのこ、しかもお坊さんぼうさんご成人と云いたいように裾短すそみじか
で袴ゆきみじか短よこで汚れ腐くさつたのを素肌すはだに着て、何だか正体の知れぬ丸ま
るきつき杖つえには長く天秤棒てんびんぼうには短いすはだのへ、五合樽ごんごうだるの空虚からと見え
るのを、樹きの皮を縄代なわわりにして縛くくしつけて、それを担かついで、夏の
炎天えんてんではないからよいようなものの跣足すあしに被り髪かぶがみ——まるで赤
く無い金太郎きんたろうといったような風体ふうていで、急足いそぎあしで遣やつて来た。

すると路みちの傍そばではあるが、川の方へ「なだれ」になつてい
 ころ一体に桑くわが仕付しつけてあるその遙はるかに下の方の低いところで、い
 ずれも十三四という女の児が、さすがに辺鄙ひなでも媚なまめき立つ年頃としごろ
 だけに紅あかいものや青いものが遠くからも見え渡る扮装つくりをして、小
 籃かごを片手に、節ひなこそ鄙ひなびてはおれど清らかな高い徹とおる声で、桑の
 嫩葉わかばを摘つみながら歌を唄うたつていて、今しも一人ひとりが、

わたしあ桑摘ぬしむ主きぎあ剽きぎまんせ、春蚕はるご上簇あがれば二人ふたり着る。

と唱い終ると、また他の一人が声張り上げて、

桑を摘め摘め、爪^{つま}紅^{べに}さした 花洛女^{みやこじよろしゆ}郎衆^{らうしゆ}も、桑を摘め。

と唱^なつたが、その声は実に前の声にも増して清い澄^すんだ声で、断^たえず鳴る笛吹川の川瀬^{かわせ}の音をもしばしは人の耳から逐^おい払^はつてしまつたほどであつた。

これを聞くとかの急ぎ^{あし}歩^{あし}で遣^やつて来^きた男の児はたちまち歩^{あし}みを遅^{おそ}くしてしまつて、声のした方を見ながら、ぶらりぶらりと歩くと、女の児の方では何かに打^{うち}興^{きよう}じて笑^{わら}い声^{こゑ}を洩^もらしたが、見る人ありとも心付かぬのであろう、桑の葉越^{はごし}に紅^{べに}いや青^{あお}い色^{いろ}をちらつかせながら余念^{ふたり}も無しに葉を摘むと見えて、しばしは静^{しず}であつたが、また前の二人^{ふたり}とは違^{ちが}つた声で、

桑は摘みましこずえ梢は高し、

と唄い出したが、この声は前のように無邪氣むじやきに美しいのでは無かつた。そうするとこれを聞いたこなたきたなの汚なりい衣服の少年は、その眼鼻立めはなだちの悪く無い割には無愛想ぶあいそうで薄淋うすさみしい顔に、いささか冷笑あざわらうような笑わらいを現わした。唱うたの主ぬしはこんな事を知ろうようは無ないから、すぐと続いて、

誰に負われて摘んで取ろ。

と唄い終ったが、末の摘んで取ろの一句だけにはこちらの少年も声を合わせて弥次馬と出掛けたので、歌の主は吃驚してこちらを透かして視たらしく、やがて笑いを帯びた大きな声で、

「源三さんだよ、憎らしい。」

と誰に云ったのだから分らない語を出しながら、いかにも蓮葉に圃から出離れて、そして振り返つて手招ぎをして、

「源三さんだつて云えば、お浪さん。早く出てお出でなネ。ホホ

わたし達が居るものだから羞しがって、はにかんでいるの。ホホ

ホ、なおおかしいよこの人は。」

と揶揄ったのは十八九のどこと無く嫌味な女であつた。

源三は一向頓着無く、

「何云つてゐるんだ、世話焼め。」

と口の中で云い棄てて、またさつさと行き過ぎようとする。圃の中からは一番最初の歌の聲が、

「何だネお近さん、源三さんに託けて遊んでサ。わたしやお前は

お浪さんの世話を焼かずと用さえすればいいのだあネ。サアこつちへ来てもつとお採りよ。」

と少し叱り気味で云うと、

「ハイ、ハイ、ご道理さまで。」

と戯れながらお近はまた桑を採りに圃へ入る。それと引違えて徐に現れたのは、紫の糸のたくさんあるごく粗い縞の銘仙の着物に紅気のかかなりある唐縮緬の帯を締めた、源三と同年か

一つも上であろうかという可愛らしい小娘である。

源三はすたすたと歩いていたが、ちようどこの時虫が知らせでもしたようにふと振返って見た。途端に罪の無い笑は二人の面に溢れて、そして娘の歩は少し疾くなり、源三の歩は大に遅くなつた。で、やがて娘は路——路といつても人の足の踏む分だけを残して両方からは小草が埋めている糸筋ほどの路へ出て、その狭い路を源三と一緒に仲好く肩を駢べて去つた。その時やや隔たつた圍の中からまた起つた歌の聲は、

わたしあ桑摘む主あ剉まんせ、春蚕上簇れば二人着る。

という文句を追いかけるように二人の耳へ送った。それは疑いも無くお近の声で、わざと二人に聞かせるつもりで唱ったらしかった。

その二

「よつぽど此村^{こつち}へは来なかつたネ。」
 と、浅く日の射^さしている高い椽^{えんがわ}側に身を靠^{もた}せて話しているのはお浪^{なみの}で、此家^{ここ}はお浪の家^{うち}なのである。お浪の家は村で指^{ゆび}折^{おり}の財^し産^{んだい}よしであるが、不^ふ幸^{しあわせ}に家族^{かぞへ}が少くつて今ではお浪とその母とばかりになっているので、召^{めしつかい}使^しも居れば傭^{やとい}の男^{おとこ}女^{おんな}も

出入りするから朝夕などは賑かであるが、昼はそれぞれ働きに出で入いしてあるので、お浪の母が残っているばかりで至つて閑寂しずかである。
特に今、母はお浪の源三を連れて帰つて来たのを見て、わたしは
ちよいと見廻みまわつて来るからと云つて、少し離はなれたところに建てて
ある養蚕所ようさんじょを監視みまわに出て行つたので、この広い家に年のいか
ないもの二人限きりであるが、そこは巡查おまわりさんも月に何度かしか回
つて来ないほどの山間やまあいの片田舎かたいなかだけに長閑のんきなもので、二人は
何の気も無く遊んでいるのである。が、上れとも云わなければ茶
一つ出そうともしない代り、自分も付合つて家へ上りもしないで
いるのは、一つはお浪の心安立こころやすだてからでもあるうが、やはりま
だ大人おとなびぬ田舎娘の素樸きじなところからであらう。

源三の方は道を歩いて来たためにちと脚が草臥あし ぐたびれているからか、腰こしを掛かけるには少し高過ぎる椽の上へ無理に腰こしを載のせて、それがために地に届かない両脚をぶらぶらと動かしながら、ちようどその下の日当りに寐ねている大な白犬の頭を、ちよつと踏んで軽かろく蹴けるように触さわつて見たりしている。日の光はちようど二人の胸あたりから下の方に当っているが、日ざしに近くいるせいだか二人とも顔が薄うすりと紅くなつて、特に源三は美しく見える。
「よつぽどつて、そうさ五日六日来なかつたばかりだ。」
と源三はお浪の言葉に穩おだやかに答えた。

「そんなものだつたかね、何だか大変長い間見えなかつたように思つたよ。そして今日きょうはまた定きまりのお酒買いかね。」

「ああそうさ、厭いやになつちまうよ。五六日は身体からだが悪いって癩かんし癩やくばかり起してネ、おいらを打ぶったり擲たいたりした代りにやあ酒買しいのお使いはせずに済すんだが、もう癒なつたからまた今日きょうっからは毎日だろう。それもいいけれど、片道一里もあるところをたつた二合ずつ買よいに遣よされて、そして氣むずかしい日にあ、こんなに量りが悪いはずはねえ、大方おおかた途とち中ちゅうで飲のんだろう、道理で顔が赤いようだなんて無理を云いつて打ぶ撲なぐるんだもの、ほんとに口措くちくつてなりやしない。」

「ほんとに嫌いやな人だつちやない。あら、お前の頸くびのところに細長あざい痣あざがついてゐるよ。いつ打ぶたれたのだい、痛いたそうだねえ。」
と云いながら傍そばへ寄よつて、源三の衣領えりくつろを寛きげて奇麗きれな指で触ふつて

みると、源三はくすぐつたいと云つたように頸を縮めて障りながら、

「お止よ。^{よし}今じやあ痛くもなんともないが、打たれた時にあ痛かつたよ。だつて布袋竹の釣竿のよく撓う奴でもつてピューツと一ツやられたのだもの。一昨々日のことだつたがね、生の魚が食べたいから釣つて来いと命令けられたのだよ。風が吹いて騒ついた厭な日だつたもの、釣れないだろうとは思つたがね、愚図^{ぐずぐ}愚図^ずしている^{しか}と叱られるから、ハイと云つて釣には出たけれども、どうしたつて日が悪いのだもの、釣れやしないのさ。夕方まで骨を折つて、足の裏が痛くなるほど川ん中をあつちへ行つたりこつちへ行つたりしたけれども、とうとう一尾^{いっぴき}も釣れずに家へ帰る

と、サア怒おこられた怒おこられた、こん畜ちく生しょうこん畜生と百ばかりも怒鳴どなられて、香魚あゆや山鯪やまめは釣れないにしても雑魚位釣れない奴があるものか、大方遊んでばかりいやがったのだろう、この食い潰つぶし野郎やろうめッてえんでもって、釣竿を引奪ひったくられて、逃にげるところを斜はすに打ぶたれたんだ。切られたかと思つたほど痛かつたが、それでも夢中むちゅうになつて逃げ出すとネ、ちやうど叔父おじさんが歸つて来たので、それで済すんでしまつたよ。そうすると後で叔父さんむかに對むかつて、源三はほんとに可愛かわいい児こですよ、わたしが血の道で口が不ま味ずくつてお飯まんまが食べられないつて云いましたらネ、何か魚でも釣つて来てお菜さいにしてあげましょうつて今まで掛かつて釣をしていましたよ、運が悪くつて一尾いっぴきも釣れなかつたけれども、ときもさ

も自分がおいらによく思われていでもするように云うのだもの、憎くつて憎くつてなりあしなかった。それもいいけれど、何ぞと
 いうと食い潰しつて云われるなあ腹が立つよ。こないだちようろくじじ 過日長 六
 爺いに聞いたたら、おいらの山を何町歩なんちようぶとか叔父さんが預あずかつて
 持つてゐるはずだつていうんだもの、それじゃあおいらは食潰し
 の事は有りあしないじゃあないか。家の用だつて随分ずいぶんたんとし
 ているのに、口くちぎたな穢けく云われるのが真実ほんとに厭だよ。おまえの母おつか
 さんはおいらが甲府へ逃げてしまつて奉公ほうこうしようというのを止
 めてくれたけれども、真実ほんとに余所よそへ出て奉公した方がいくらい
 か知れやしない。ああ家に居たくない、居たくない。」
 と云いながら、雲は無いがなんとなく不透明ふとうめいな白みを持つてい

柔^{やわらか}和^わな青^{あお}い色^{いろ}の天^{そら}を、じーつと眺^{なが}め詰^つめた。お浪^{はな}もこの夙^{はや}く
 父^{ちち}母^{はは}を失^はつた不幸^{ふこう}の児^こが酷^{むご}い叔^お母^ぼに窘^{くまる}められる談^{はなし}を前^{まへ}々^々から聞^き
 いて知^しつてい^いる上^{うへ}に、しかも今^{いま}のよう^{よう}な話^わを聞^きいたのでい^いささか
 涙^{なみだ}ぐんで茫^{ぼう}然^{ぜん}として、何^{なん}も無^ない地^{つち}の上^{うへ}に眼^めを注^ついで身^み動^{うご}もしな
 いでいた。陽^{やう}気^きな陽^{やう}気^きな時^{とき}節^{せつ}ではあるがちよつとの間^まはしーんと
 静^{しず}になつて、庭^{てい}の隅^{すみ}の柘^{ざくろ}榴^ろの樹^きの周^{まわ}りに大^{おほ}きな熊^{くま}蜂^{ばち}がぶーんと
 羽^は音^{おと}をさ^させてい^いるの^のが耳^{みみ}に立^たつた。

その三

色^{いろ}々な考^{かん}えに小^{ちひ}な心^{こころ}を今^{いま}さら新^{あらた}に紛^{もつ}れさせながら、眼^めばかりは

見るものの当あても無い天そらをじつと見ていた源三は、ふつと何なんの禽とりだ
 か分らない禽の、姿も見えるか見えないか位に高く高く飛んで行
 くのを見つけて、全くお浪に對むかつてでは無い語氣で、

「禽は好いいなア。」

と呻うめき出した。

「エツ。」

と言いながら眼を挙あげて源三が眼の行く方かたを見て、同じく禽の飛
 ぶのを見たお浪は、たちまちにその意こころを悟さとつて、耐たえられなくな
 ったか泣げん然ぜんとして涙を墮おとした。そして源三が肩かた先さきを把とらえて、
 「またおまえは甲府へ行つてしまおうと思つてゐるね。」

ときも恨うらめしように、しかも少しそうはさせませぬという圧あつ制せい

の意の籠こもつたような語の調子で言った。

源三はいささかたじろいだ気味で、

「なあに、無暗むやみに駈かけ出して甲府へ行つたつていけないというこ

とは、お前の母おつかさん様の談はなしでよく解わかっているから、そんな事は思

つてはいないけれど、余あんまり家に居て食い潰し食い潰しつて云われ

るのが口惜くやしいから、叔父さんにあ済まないけれどどこへでも出て、

どんな辛い思つらいをしてしても辛しん棒ぼうをして、すこしでもいいから出世

したいや。弱虫だ弱虫だつて衆みんなが云うけれど、おいらだつて男の

児だもの、窘いじめられてばかりいたかあ無いや。」

と他の意ひとこころに逆さからわぬような優しい語気ではあるが、微塵みじんも偽いつわり気

は無い調子で、しみじみと心うちの中を語つた。

そこで互たがいに親み合つてはいても互こころに意むきの方向ちがの異ちがっている二人の間に、たちまち一条の問答が始まつた。

「どこへでも出て辛棒をするつて、それじゃあやつぱり甲府へ出ようつて云うんじゃあないか。」

とお浪は云い切つて、しばし黙だまつて源三の顔を見ていたが、源三が何とも答えないのを見て、

「そーれご覧らん、やつぱりそうしようと思つておいでのだろう。それあおまえも、品質ものが好いからつて二合ばかりずつのお酒をその度々たびたびに釜川から一里もあるこの釜和原まで買いに遣よこすような酷ひどい叔母様おばさんに使つかわれて、そうして釣竿で打ぶたれるなんて目に逢うのだから、辛つらいことも辛つらいだろうし口惜くやしいことも口惜くやしいだろう

が、先日せんのように逃げ出そうと思ったりなんぞはしちやあ厭だよ。
ほんとに先日いつかの夜ばんだつて吃驚びつくりしたよ。いくら叔母さんが苛ひどいつ
たつて雪の降つてる中を無暗に逃げ出して来て、わたしの家とこへも
知らさないで、甲府へ出てしまつて奉公しようと思うとつて、夜
にもなつてゐるのにそつと此村ここを通り抜けてしまおうとしたじや
あないか。吾家うちの母おつかさんが与惣次よそうじさんところへ招よばれて行つた帰か
路えりのところへちようどおまえが衝突ぶつつたので、すぐに見つけられ
て止められたのだが、後で母おつかさん様のお話にあ、いくら下りだつ
て甲府までは十里近くもある路を、夜にかかつて食物の準備よういも無
いの、足あしごしらえも無しで雪の中を行こうとは怜悧りこうのようでも
真実ほんとに児童こどもだ、わたしが行き合つて止めでもしなかつたらどんな

事になったか知れやしない、思い出しても怖おそい事だと仰おつしやつた
 よ。そればかりじゃあ無い、奉公をしようと云つたつて請うけにん人と
 いうものが無けりやあ堅かたい良い家うちじやあ置いてくれやしないし、
 他人ばかりの中へ出りやあ、この児はこういう訳のものだから慥か
 わいそう然ぜんだと思つてくれる人だつて有りやあしない。だから他郷よそへ
 出て苦勞をするにしても、それその道順を踏ふまなければ、ただ
 あつちこつちでこづき廻まわされて無駄むだに苦しい思おもいをするばかり、そ
 のうちにあ碌ろくで無い智慧ちえの方が付きがちのものだから、まあまあ
 無暗に広い世間へ出たつて好いことは無い、源さんも辛いだろう
 がもう少し辛棒しんぼうしていてくれれば、そのうちにあどうかしてあげ
 るつもりだと吾家うちの母おつかさんがお話しだつた事は、あの時の後にも

わたしが話したからおまえだつて知りきつているはずじゃあ無いかエ。それだのにまだおまえは隙すきさえありやあ無鉄砲むてっぽうなことをしようとお思ひのかエ。」

と年齢としは同じほども女だけにませたことを云つたが、その言葉の端々はしはしにもこの女の伶俐りこうで、そしてこの児を育てている母の、分別かしこの賢い女であるということも現れた。

源三は首を垂たれて聞いていたが、

「あの時は夢中になつてしまったのだもの、そしてあの時おまえの母様おつかさんにいろんな事を云つて聞かされたから、それから無暗の事なんかしようとは思つてやしないのだヨ。だけれどもネ、」
と云いさして云い澱よどんでしまった。

「だけれどもどうしたんだエ。ああやっぱり吾家の母様の云うことなんか聴かないつもりなのだネ。」

「なあに、なあにそうじゃないけれども、……」

「それ、お見、そうじゃあないけれどもってお云いでも、後の語は出ないじゃあないか。」

「……………」

「ほら、ほら、問えてしまつて云えないじゃあないか。おまえはわたし達に秘していても腹中じゃあ、いつか一度は、誰の世話にもならないで一人で立派なものになろうと思つて居るのだネ。イイエ頭を掉つてもそうなんだよ。」

「ほんとにそうじゃないって云うのに。」

「イイエ、何と云つてもいけないよ。わたしはチャーンと知つて
いるよ。それじやあおまえあんまりというものだよ、何もわたし
達あおまえの叔母おばさんに告いっけぐち口でもしやしまいし、そんなに秘かく
し立だてをしなくつてもいいじやあないか。先せんの内はこんなおまえじ
やあなかつたけれどだんだんに酷い人におなりだネエ、黙々だんまりで
自分の思い通りを押通おしとおそうとお思いのだもの、ほんとにおまえ
は人が悪い、怖こわいような人におなりだよ。でもおあいにくさまだ
が吾家うちの母おっかさん様はおまえの心持を見通していらしつて、いろい
ろな人にそう云つておおきになつてあるから、いくらお前が甲府
の方へ出ようと思つたりなんぞしてもそうはいきません。おまえ
の居る方から甲府の方へは笛吹川の両岸のほかには路は無い、そ

の路にはおまえに無暗なことをさせないようにと思つて見ている人が一人や二人じゃあ無いから、おまえの思うようにあなりあしないヨ。これほどに吾家の母様の為さるのも、おまえのためにいいようにと思つていらつしやるからだとお話があつたわ。それだのに禽とりを見て独語ひとりごとを云つたりなんぞして、あんまりだよ。
「」

と捲まくし立ててなおお浪の言わんとするを抑おさえつけて、

「いいよ、そんなに云わなくつたつて分つているよ。おいらあ無暗に逃げ出したりなんぞしようと思つてやしないというのに。」
と遮さへぎる。

「おや、まだ強情ごうじやうに虚言うそをお吐きだよ。それほど分つてい

ならなぜ禽はいいなあと云ったり、だけれどもネと云つて後の言葉云えなかつたりするのだエ。」

と追^{ついきゆう}窮^{きゆう}する。追窮されても窘^{くるし}まぬ源三は、

「そりやあただおいらあ、自由自在になつていたら嬉しいだろうと思つたからそう云つたのさ。浪ちやんだつてあの禽のように自由だつたら嬉しいだろうじやあないか。」

と云うと、お浪はまた新に涙ぐんで其言^{それ}には答えず、

「それ、その通りだもの。おまえにやまだ吾家^{うち}の母^{おつか}さんのわた

しだのが、どんなにおまえのためを思っているかが解らないのか

ネエ。真実^{ほんと}におまえは自分勝手^{がって}ばかり考えていて、他の親切^{ひと}とい

うものは無にしても関^{かま}わないうのだネ。おおかたわたし達も

誰も居なかつたら自由自在だつておまえはお悦びだろうが、あんまりそりやあ^{きずい}氣随過^すぎるよ。吾^{うち}家の母^{おつかさん}様もおまえのことには大層心配をしていらしつて、もう少しするとおまえのところの叔父さんにちやんと談をなすつて、何でもおまえのために悪くないようにしてあげようつて云つていらつしやるのだから、辛いだろうがそんな心持を出さないで、少しの間辛抱おしでなくちやあ濟まないわ。」

としみじみと云うその真^{まごころ}情に誘^{さそ}い込まれて、源三もホロリとはなりながらなお、

「だって、おいらあ男の児だもの、やっぱり一人で出世したいや。」

と自分の思わくとお浪の思わくとの異ちがつてゐるのを悲おもむ色もてを面おもに
 現あらしつつ、正直ごうじようにしかも剛ごう情じように云いつた。その面おも貌つきはまるで
 小児こどもらしいところの無い、大人おとなびきつた寂さびきつたものであつた。
 お浪はこの自己おのれを恃たのむ心ことばのみ強い言ことばを聞きいて、驚おどろいて目めを瞠みはつ
 て、

「一人でつて、どう一人でもつて？」

と問い返したが返辞が無かつたので、すぐとまた、

「じゃあ誰の世話にもならないでというんだネ。」

と質ただすと、源三は術無じゆなそうに、かつは憐あわれ愍みと宥ゆる恕しとを乞こうよう

な面かおをして微かすに点うな頭ずいた。源三の腹の中は秘かくしきれなくなつて、

ここに至つてその継子ままこ根性こんじようの本相ほんしようを現あらわしてしまつた。し

かし腹の底にはこういう僻ひがみを持っていても、人の好意に負そむくこととは甚ひどく心苦しく思っているのだ。これはこの源三が優しい性うまれ質つきの一角と云おうか、いやこれがこの源三の本来の美しい性質で、いかなる人をも頼たのむまいというようなのはかえって源三が性質の中のある一角が、境きよう遇ぐうのために激げきせられて他の部よりも比較ひかくてき的に発展したものであろうか。

お浪は今明らかに源三の本心を読んで取ったので、これほどに思っている自分親子をも胸おくの奥おくの奥では袖そでにしている源三のその心強さが怨うらめしくもあり、また自分が源三に隔へだてがましく思われているのが悲しくもありするところから、悲痛の色を眉目びもくの間にかん浮うかめて、

「じゃあ吾家うちの母おつかさん様の世話にもなるまいというつもりかエ。

まあ怖しい心持におなりだネエ、そんなに強きつくならないでもよさ
そうなものを。そんなおまえじゃあ甲府の方へは出すまいとわ
たし達つくりがしていても、雁坂を越えて東京へも行きかねはしない、吃び
驚するほどの意地ぎよつつ張りにおなりだから。」

と云った。すると源三はこれを聞いて愕然ぎよつとして、秘せぬ不安の
色をおのずから見せた。というものは、お浪が云った語ことばは偶然ぐうぜん
であつたのだが、源三は甲府へ逃げ出そうとして意こころを遂げなかつ
た後、恐ろしい雁坂を越えて東京の方へ出ようと試みたことが、
既すでに一度で無く二度までもあつたからで、それをお浪が知つてい
ようはずは無いが、雁坂を越えて云々しかじかと云い中あてられたので、突

きなりするど
然に鋭い矢を胸の真真正中に射込まれたような気がして驚いたのである。

源三がお浪にもお浪の母にも知らせない位であるから無論誰にも知らせないで、自分一人で懐いている秘密はこうである。一体源三は父母を失ってから、叔母が片付いている縁によつて今の家に厄介になつたので、もちろん厄介と云つても幾許かの財産をも預けて寄食していたのだからまるで厄介になつたという訳では無いので、そこで叔母にも可愛がらるればしたがって叔父にも可愛がられていたところ、不幸にしてその叔母が病気で死んでしもうて、やがて叔父がどこからか連れて来たのが今の叔母で、叔父は相変らず源三を愛しているに關らず、この叔父の後妻はどう

いうものか源三を窘めること非常なので、源三はついに甲府へ逃に
げて奉公しようと、山奥の児童にも似合わない賢いことを考え出
して、既にかつて堪えられぬ虐待を被った時、夢中になつて
走り出したのである。ところが源三と小学からの仲好朋友で
あつたお浪の母は、源三の亡くなった叔母と姉妹同様の交情
であつたので、我が親かつたものの甥でしかかも我が娘の仲好しで
ある源三が、始終履歴の汚れ臭い女に酷い目に合わされているの
を見て同情に堪えずにいた上、ちやうど無暗滅法に浮世の
渦の中へ飛込もうという源三に出会つたので、取りあえずその逸
り気な挙動を止めておいて、さて大に踏ん込んでもこの可憫な
児を危い道を履ませずに人にしてやりたいと思ひ、その娘のお浪

はまたただ何と無く源三を好くのと、かつはその可哀な境遇を氣
 の毒どくと思うのとのために、これもまたいろいろに親切にしてやる。
 これらの事情の湊合そうごうのために、源三は自分の唯一ゆいいつの良案と信
 じている「甲府へ出て奉公住みする」という事をあえてしにくい
 ので、自分が一刻も早く面白くない家を出てしまつて世間へ飛び
 出したいという意こころからは、お浪親子の親切を嬉しいとは思ひなが
 ら難有迷惑ありがためいわくに思う気味もあるほどである。もちろんお浪親子
 がいかにも一本路を見張つてゐるにしても、その眼を潜くぐつて甲府へ
 出ることはそれほど難しいことでは無いが、元は優しいので弱虫
 弱虫ほかと他の兒童等こどもたちに云われたほどの源三には、その親切なお浪
 親子の家の傍を通つてその二人を出し抜ぬくことが出来ないのだ

った。しかし家に居たく無い、出世がしたい、奉公に出たらよろうと思わずにはいられない自分の身の上の事情は継続けいぞくしているので、小耳に挟はさんだ人の談話はなしからついに雁坂を越えて東京へ出ようという心が着いた。

東京は甲府よりは無論佳よいところである。雁坂を越して峠向とうげうの水に随ついてどこまでも下れば、その川は東京の中を流れている墨田川すみだがわという川になる川だから自然と東京へ行ってしまうということを聞きかじっていたので、何でも彼嶺あさえ越せばと思って、前の月のある朝酷ひどく折檻せつかんされたあげくに、ただ一人思い切つて上りかけたのであつた。けれどもそこは小児こどもの思慮かんがえも足らなければ意地も弱いので、食物を用意しなかつたため絶頂までの半分

も行かぬ中に腹は減へつて来る気は萎なえて来る、路はもとより人じんせ
 跡き絶きえているところを大おお概よその「勘かん」で歩くのであるから、忍が
 耐まんに忍耐がまんしきれなくなつて怖こわくもなつて来れば悲しくもなつて来
 る、とうとう眼を凹くぼませて死にそうになつて家へ歸つて、物置の
 隅すみで人知れず三時間も寐ねてその疲つか勞れを癒いしたのであつた。そこで
 その四五日は雁坂の山を望んでは、ああとでもあの山は越えられ
 ぬと肚はらの中で悲しみかえつていたが、一度その意こころを起したので日ひ
 数かずの立つ中うちにはだんだんと人の談話はなしや何かが耳に止まるため、次
 第次第に雁坂を越えるについての知識を拾い得た。そうするとま
 たそろそろと勇いき氣おいが出て来て、家を出てから一里足らずは笛吹
 川の川かわ添ぞいを上つて、それから右手の嶺みね通どりの腰をだんだんと

「なぞえ」に上りきれば、そこが甲州武州^{ぶしゅう}の境で、それから東^ひへと走っている嶺^{がしきた}を伝わって下つて行けば、ついには一つの流^{ながれ}に会う、その流に沿^そうて行けば大滝村^{おおたきむら}、それまでは六里余り無人の地だが、それから盲目^{めくら}でも行かれる楽な道だそうだが、何でも峠^{とうげ}さえ越してしまえば、と朝晩雁坂の山を望んでは、そのむこうに極楽でもあるように好ましげに見ていた。

すると叔父は山持^{かせ}ぎをするものの常で二三日帰らなかつたある夜の事であつた。叔母の肩^{かた}をば揉^もんでいる中^{うち}、夜も大分^{だいぶん}に更^ふけて来たので、源三がつい浮^うりとして居睡^{いねむ}ると、さあ恐ろしい煙管^{きせる}の打^{うち}擲^{やく}を受けさせられた。そこでまた思い切つてその翌朝^{よくあさ}、今度は団飯^{むすび}もたくさんに用意する、銭^{かね}も少しばかりずつ何ぞの折

々に叔父に貰^{もら}ったのを溜^ためておいたのをひそかに取り出す、足ご
 しらえも嚴重にする、すつかり仕度^{したく}をしてしまつて釜川^{うしろ}を背後に、
 ずんずんずんと川上に上つた。やがて小^こ一里も来たところで、
 さあここから川の流れに分れて、もう今まで昼となく夜となく
 眼にしたり耳にしたりしていた笛吹川もこれが見納めとしなけれ
 ばならぬという場所にかかった。そこで歳^{とし}こそ往^ゆかないが源三も
 なんとなく心淋しいような感じがするので、川の側^{そば}の岩の上にし
 ばし休んで、
 どうとう 轆^{おもい}と流れる水のありさまを見ながら、名づけよ
 うを知らぬ一種の想念^{おもひ}に心を満たしていた。そうするといづくか
 らともなく人声が聞えるようなので、もとより人も通わぬこんな
 ところで人声を聞こうとも思いがけなかった源三は、
 ひとたび 一度は愕^ぎ

然として驚いたが耳を澄まして聞いていると、上の方からだんだんと近づいて来るその話声は、復び思いがけ無くもたしかに叔父の声音だった。そこで源三は川から二三間離れた大きな岩のわずかに裂け開けているその間に身を隠して、見咎められまいと潜んでいると、ちょうど前に我が休んだあたりのところへ腰を下して憩んだらしくて、そして話をしているのは全く叔父で、それに応答えをしているのは平生叔父の手下になつては持ぐ甲助という村の者だった。川音と話声と混るので甚く聞き辛くはあるが、話の中に自分の名が聞えたので、おのずと聞き逸すまいと思つて耳を立てて聞くと、「なあ甲助、どうせ養子をするほどでも無い財産だから、鼻が勧める鼻の甥なんぞの気心も知れねえ奴を入れ

るよりは、りこう 伶俐で天賦たちの良いあの源三におらが有もつたものは不殘みんな
 遣やるつもりだ。そうしたらあいつの事だから、まさかおらが亡く
 なつたつておらの墓はかを草くさ中に転ころげさせてしまいもすめえと思う
 のさ。前の鼻はなにこそ血筋ちすじは引け、おらには縁ゆかりの何も無いが、おら
 あ源三が可愛かわいくつて、家へ帰るとあいつめが叔父さん叔父さんと
 云いいやがつて、草鞋わらじを解といてくれたり足の泥どろを洗せんつてくれたり何
 やかやと世話を焼やいてくれるのが嬉うれしくてならない。子こという者
 あ持もつたことも無いが、まあ子も同様に思おもっているのさ。そこで
 おらあ、今はもう持もがないでも食くつて行いかれるだけのことは有ある
 が、まだ仕合しあわせに足腰も達者だから、五十と声こゑがかかつちやあ身か
 体からだは太義たいぎだが、こうして持もいで山林方やまかたを働はたらいている、これも皆少みなち

でも延ばしておいて、源三めに与^やつて喜ばせようと思うからさ。

^{きよう}

どれどれ今日は三四日ぶりで家へ歸つて、叔父さん叔父さんてあ

^{にこつく}

いつめが莞爾^{にこつく}顔を見よう、さあ、もう一服やったら出掛けよう

^{たかばなし}

ぜ」と高^{たかばなし}話して、やがて去つた。これを聞いていた源三はし

^{ほどた}

くしくしくしくと泣き出したが、程^{ほどた}立つて力無げに悄^{しよんぼり}然と岩

^{なみだ}

の間から出て、流^{しも}の下の方をじつと視^みていたが、堰^せきあえぬ涙^{なみだ}を

^{はら}

払^{はら}つた手の甲^{ふつと}を偶然見ると、ここには昨夜^{ゆうべ}の煙管^{きつ}の痕^{かしら}が隠^あ々^{いんいん}と

^{きつ}^{かしら}

青く現れていた。それが眼に入るか入らぬに屹^{きつ}と頭^{かしら}を擡^あげた源三

^{にら}

は、白い横長い雲がかかっている雁坂の山を睨^{にら}んで、つかつかと

^{あし}

山手の方へ上りかけた。しかしたちまちにして一ト歩^{あし}は一ト歩^{あし}よ

^{おそ}

り遅^{おそ}くなって、やがて立止まったかと思えるばかりに緩^{のろ}く緩^{のろ}くな

ったあげく、うつかりとして脱石ぬけいしに爪端つまさきを踏掛ふんがけけたので、
 ずるりと滑るすべ、よろよろと踉蹌よろける、ハツと思う間も無くクルリ
 と転まわつてバタリと倒れたが、すぐには起きも上り得ないでまず地つち
 に手を突ついて上半身を起して、見ると我が村の方はちようと我が
 眼の前に在った。すると源三は何を感じたか滝たきのごとくに涙を墜おと
 して、ついには噉すり泣なきして止まなかつたが、泣いて泣いて泣き尽つく
 した果はてに竜鍾しおしおと立上つて、背中に付けていた大な団飯おおきむすびを抛ほうり捨
 ててしまつて、吾家わがやを指して立歸つた。そして自分の出来るだけ
 忠実まめやかに働いて、叔父が我が拳動しうちを悦んでくれるのを見て自分も
 心から喜ぶ余りに、叔母の酷むごさをさえ忘れるほどであつた。それ
 で二度までも雁坂越をしようとした事はあつたのであるが、今日

まで噫おくびにも出さずにいたのであつた。

ただよく愛するものは、ただよく解するものである。源三が懷いだいているこういう秘密を誰から聞いて知ろうようも無いのであるが、お浪は偶然にも云い中あてたのである。しかし源三は我が秘密はあくまでも秘密として保つて、お浪との会話はなしをいい程ほどのところさえぎに遮り、余り帰宅かえりが遅くなつてはまた叱られるからという口実のもとに、酒店さかやへと急いで酒を買い、なお村の尽頭はずれまで連れ立つて来たお浪に別れて我が村へと飛ぶがごとくに走り歸つた。

その四

ちようどその日は樽たるの代り目で、前の樽の口のと異ちがつた品ではあるが、同じ価ねの、同じ土地で出来た、しかも質ものは少し佳よい位のものであるという酒店さかやの挨拶あいさつを聞いて、もしや叱責こごとの種子たねにはなるまいかと鬼胎おそれを抱いだくこと大方ならず、かつまた塩文しおとびを買つて来いという命令いいつけではあつたが、それが無かつたのでその代りとして勧められた塩鯖しおさばを買つたについても一ト方ならぬ鬼胎おそれを抱いた源三は、びくびくもので家の敷居しきいを跨またいでこの経由わけを話すと、叔母の顔は見る見る恐ろしくなつて、その塩鯖の※包みかわづつを手にするや否いなやそれでもつて散々さんざんに源三を打ぶつた。

何で打たれても打たれて佳いというものがあるはずは無いが、火を見ぬ塩魚わるなまぐさの悪わるなまぐさ腥い——まして山里の日増しものの塩鯖の

腐^{くさ}りかかったような——奴^{やつ}の※包^かみで、力任せに眼とも云わず鼻とも云わず打たれるのだから堪^{こら}えられた訳のものでは無い。まずたけ^{たけのか}のかわ^{すじ}すじ※は幾^{いく}条^{じょう}にも割^われ裂^さける、それでもつて打たれるので※^{かわ}の裂目^{さき}のひりひりしたところが烈^{はげ}しく触^{さわ}るから、ごくごく浅^あい疵^{きず}ではあるが松葉^{まつば}でも散らしたように微^か疵^{すりきず}が顔へつく。そこへ塩^{しお}氣^けがつく、腥^{なまぐさ}氣^きがつく、魚^い肉^くが迸^は裂^ぜて飛^とんで額^{ひたい}際^{ぎわ}にへばり着^くいているという始末、いやはや眼も当てられない可^い厭^やな窘^{いじ}めようで、叔母のする事はまるで狂^き氣^{ちがい}だ。もちろん源三は先妻の縁引^{えんひき}きで、しかも主人^{あるじ}に甚^{ひど}く氣に入^いって、それがために自分^{おれ}がここへ養子^{やし}に入れて、生活^{くらし}状態^{げいま}の割^{わり}には山林^{やま}やなんぞの資産^{しさん}の多いのを譲^{ゆず}り受けさせようと思^{おも}っている我が甥^{わがは}がここへ入^いれないので

あるから、憎いにはあくまで憎いであろうが、一つはこの女の性質がざんにん残忍なせいでもあろうか、またあるいは多くの男に接したりなんぞして自然の法則を蔑視した婦人等おんなたちは、ややもすれば年とし老いて女の役の無くなる頃に臨むと奇妙きみようにも心状が焦躁じれたり苛いらひど酷くなったりしたがるものであるから、この女もまたそれ等の時に臨んでいたせいでもあろうか、いかに源三のした事が気に入らないにせよ、随ずいぶん分尋常外れた責めかたである。

最初は仕方が無いと諦めて打たれた。二度目は情無いと思いがら打たれた。三度目四度目になれば、口惜しいと思ひながら打たれた。それから先はもう死んだ氣になつてしまつて打たれてはたが、余りいつまでも打たれている中に障うちえることの出来ない怒いかり

が勃然^{ぼつぜん}として骨々^{ほねほね}節々^{ふしぶし}の中から起つて来たので、もうこれまでと源三は抵抗^{ていこう}しようとしかけた時、自分の氣息^{いき}が切れたと見えて叔母は突き放^{ゆる}つて免した。そこで源三は抵抗もせずに、我を忘れて退いて平伏^{ひれふ}したが、もう死んだ氣どころでは無い、ほとんど全く死んでいて、眼には涙も持たずにいた。

その夜源三は眠^{ねむ}りかねたが、それでも少年の罪の無さには曉^{あかつ}天方^{きかた}になつてトロリとした。さて目※^{まどろ}む間も無く朝早く目が覚めると、平生^{いづも}の通り朝食^{あさめし}の仕度にと掛つたが、その間々^{ひまひま}にそろりそろりと雁坂越の準備^{ようい}をはじめて、重たいほどに腫^はれた我が顔の心地悪^あしさをも苦にせず、団飯^{むすび}から脚^{あし}ごしらえの仕度まですつかりして後、叔母にも朝食をさせ、自分も十分に喫^{きつ}し、それか

ら隙すきを見て飄然ふいと出てしまった。

家を出て二三町歩いてから持つて出た脚絆きやはんを締め、団飯むすびの風

ろしきづつ

呂敷包みをおのが手作りの穿替はきかえの草鞋わらじと共に頸くびにかけて背負

い、腰の周囲まわりを軽くして、一ト筋の手拭てぬぐいは頬ほおかぶり、一ト筋の

手拭は左の手首に縛くくしつけ、内懐うちぶところにはお浪にかつてもらった

もめんざいふ

木綿財布に、いろいろの交り銭まじのぜに一円少し余よを入れたのを確しかと納

め、両の手は全空まるあきにしておいて、さて柴刈しばかり鎌がまの柄えの小長い奴

を右手に持ったり左手に持ったりしながら、だんだんと川上へ登

り詰めた。

やがて前さきの日叔父ことばの言を聞いて引返したところへかかると、源

三の歩みはまた遅くなった。しかし今度は、前さきの日自分が腰掛け

た岩としばらく隠れた大な岩とをやや久しく見ていたが、そのあげくに突然と声張り上げて、ちとおかしな調子で、「我は官軍、我が敵は」と叫び出して山手へと進んだ。山鳴り谷答えて、いずくにか潜んでゐる悪魔でも唱い返したように、「我は官軍我敵は」という歌の声は、笛吹川の水音にも紛れずに聞えた。

それから源三はいよいよ分り難い山また山の中に入つて行つたが、さすがは山里で人となつただけにどうやらこうやら「勘」を付けて上つて、とうとう雁坂峠の絶頂へ出て、そして遙に遠く武蔵一國が我が脚下に開けているのを見ながら、蓬々と吹く天の風が頬被りした手拭に当るのを味つた時は、躍り上り躍り上つて悦んだ。しかしまた振り返つて自分等が住んでいた甲斐の国

の笛吹川に添う一帯の地を望んでは、黯あんぜん然ぜんとしても心も昧くらくなるような氣持がして、しかもその薄うっすりと霞かすみんだ霞そこの底から、

桑を摘め摘め、爪紅みやくこさした、花洛じよろしゆ女郎衆も、桑を摘め。

と清い清い澄み徹とおるような声で唱い出されたのが聞えた。もとより聞えるはずが有ろう訳は無いのであるが。

（明治三十六年五月）

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 幸田露伴」筑摩書房

1992（平成4）年3月20日第1刷発行

底本の親本：「露伴全集」岩波書店

※底本の「小書き片仮名ト」（JIS X 0213、1-6-81）は、「ト」に置き換えました。但し「トロリ」（底本78ページ下行）の「ト」を除きます。

※本作品中には、今日では差別的表現として受け取れる用語が使用されています。しかし、作品の時代背景と価値、加えて、作者の抱えた限界を読者自身が認識することの意義を考慮し、あえて

発表時のままとしました。(青空文庫)

入力：kompass

校正：林 幸雄

2001年10月2日公開

2003年11月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雁坂越

幸田露伴

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>